
祓い屋 ~ exorcism of monster ~

竜田 なつめ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

被い屋 \ exorcism of monster \

【Nコード】

N6994P

【作者名】

竜田 なつめ。

【あらすじ】

憑依霊・ツキモノを器から清める被い屋の一人が共に闘う遣い魔を得る。

序・被い屋

被い屋

そんなことをしながら、各地を放浪して半年、まあそれなりに板についてきたかと最近思い始めた。

といっても、町全体に被害を与えるようなでかい事件に出くわしたことはないけどな・・・。

それでも、これまでに何度か同業者と協力したこともあった。

被い屋とは何をするのかというと、主に人や物にとり憑いた憑依^{ツキ}モを清めることが仕事だが、場合によってはそのツキモノと戦うこともある、しかし被い屋は肉体や器、土地からツキモノを追いつくし本体を清めるしかできない、故に退治となると神官や祝詞士^{のりと}、などの退治の専門家に任せるしかない。当然そのツキモノは霊的な何かなわけで、この世に存在する普通の武器では通用しないやっかいな相手だ。

まあ、被い屋もその霊的な何かに働きかけて清めてるのは確かだけど・・・専門家に言わせると、被い屋の清めの霊力と、退魔の霊力は全くの別物なのだそうだ。

そんなわけで、俺たち被い屋は、基本的にとり憑かれた生き物に對抗する最低限の武具しか身に着けていないため（最悪、器になっっている生き物のことを殺すためだ）、ツキモノの退治にはなかなか迅速に対応できていないのが現状である。

そんな現状を打破しようと考えだされたのが、遣い魔である。

憑かれている器は、ツキモノに新たにとり憑かれることは無く、ツキモノと反発するため、その器を俺達被い屋がツキモノの意志のみを封印し、ツキモノの霊力を利用して打撃を与えることで、ツキモノを弱らせることができる。人によっては、憑かれている人とコ

ンビを組んでツキモノ退治をするため、遣い魔という呼び名になったんだ。

俺に遣い魔はまだない、そこまで緊急な事件にあったことないし、だいたい危険そうなき分かるし、そのときは遣い魔を持ってる同業者か退治屋に同伴を依頼するからな・・・。

まあ、そんなふうの旅してる途中、町はずれの修道院までに手紙を届ける用事を頼まれた。街道からそんな離れた場所じゃなさそうなので引き受けたんだが・・・。

First Story - 修道院への手紙 -

近くの町で被い屋の仕事を終えると、依頼主の祖母から町はずれの修道院にいる孫へ、手紙を届けてくれと言われた。

最近、神官の祝福を頂いてないからちよいどいいと思い引き受けたが、修道院は森の中にあり、行く途中に林道から外れたようので、迷ってしまった・・・。

方位磁石もなぜだか言うことを聞いてくれず、街道に出ることすら出来ない状況だった。

「というか、もう少しきれいに道を補修してくれてれば迷わなかったのに・・・」

修道院へ行き来する人は少ないようで、獣道がひどく入り乱れていた。その中で一番使用頻度の多そうな道を選んできたが、いつの間にか道がなくなっていた。

「・・・方位磁石が利かないし、やっぱり戻ってみるかぁ・・・」

そう思い、踵を返した時、今まで進んだ方向から突風が吹いてきた。

ぶおおおおお！！

「・・・・・・・・」

それも、ただの風ではないようだ。風の吹いてきた方へ再び振り向き、神経を集中させる。

「……。若干、憑依靈ツキモの気配がするが……。弱いな、修道院もあるし抑制が利いてるのか？ いや、でもさっきの風は結構濃い靈力が……。」

少しその場に留まって気配を探ってみたが、強まる気配も、移動する気配も感じ取れないので、修道院へ報告するだけで十分と判断し、再び踵を返して来た道を戻ることにした。

つい癖で方位磁石をもう一回見ると、針は安定して正確な方位を指していた。

しばらくして、ようやく修道院に辿り着いた。町を出たのが遅めの昼食を食べてからだだったことと、道に迷ったため1時間半程かかったようだ。修道院の建てられた場所はかなり広く、建物を正面にして左手には畑があり、右手では牛や羊を放牧しているようだった。ちなみにこの入口から修道院の建物まで数？の道がまっすぐ伸びている。

その道を歩いていると、畑仕事をしていた修行僧の若い男が話しかけてきた。

「こんにちは。アキシナ修道院へよくぞおいでくださいました。旅の方とお見受けいたしますが、ご用は院長に？」

「ええ、とりあえずそのつもりです。」

修行僧の男は一礼すると、修道院へ駆けて行った。

なかなかのスピードだ、この距離なのにもう見えなくなってしまうた……。

修道院の中に入ると院長と思わしき神官と傍らにシスターが控え

ていた。

「ようこそ、旅のお方よ。・・・被い屋の方ですか？」

さすが院長、神官なだけあって、霊力を感じ取ったそうだ。

「はじめまして、確かに被い屋の者ですが、本日は別の要件できました。こちらで修行中のライヤさんの祖母から手紙を受け取ってきました。」

「これは、ありがとうございます。シスター・アメルダ、手紙を受け取りライヤの私室へ届けてください。」

シスターは静かに返事をして、音もなく歩み寄ってきた。手紙を渡すと一礼して、右奥の方へ姿を消した。

それを見送ったあと、例のツキモノの気配について報告することにした。

「それと、もうひとつお伝えすることがあります。神官様、この森にかなり弱いですがツキモノがいるそうですので、修行僧達にも警戒するようにと。」

「ほう、この森のツキモノに気付かれたとなると、なかなか感覚が研ぎ澄まされているようですね。」

「え？」

「半年前に訪れた被い屋の方にも言われたのです。かなり弱いので、修道院にすら近づくことができないようで、被害が出ることはないだろうと言われましたよ。実際、何も被害はありませんし、最近の来た被い屋の方に尋ねても問題ないそうでしたので、いなくなっただだと思っております。」

「そうですね・・・しかし、私が感づいた奴は、一瞬だけ霊力を解放したように力が大きくなったので、それで気付いたのです。なの

で、まったく危険がないとは言切れないようです。半年前とは別の奴なのか、それとも同じ奴が力を付けたのか分かりませんが。」
「……なるほど、分かりました、私も気に掛けておきますが、修行に影響が出るといけないので、院生達には伝えないでおきます。半年前の時に、敷地外への外出は控えるように言っているんで、それで問題ないでしょう。」

「そうですか……」

『できれば、すぐに動いてほしいんだが……。数日、様子を見るか。』

そうですね。分かりました、一応心配なので、数日厄介になってもよろしいですか？神気の祝福も最近受けてないので、お願いしたいのですが。」

「もちろんです。シスター・アメルダがそろそろ戻ってくるころだと思うので、お部屋を……」

「院長さん！ネーラただいま戻りました。」

ネーラという少女が修道院に入ってくるなりバケットを院長へ差出した。薬草が上にかけられている布巾からはみ出していたため、薬草採取から帰ってきたのだろう。

院長はお礼を言い、バケットを受け取り、彼女を紹介してくれた。

「この子はネーラです、町で孤児になったところを修道院で引き受けたのです。」

「こんにちは、ネーラです。」

「こんにちは、よろしく。ネーラ。」

「優秀な子でいろいろと、手伝ってくれるんですよ。」

ネーラは小柄な少女で、身長は被い屋の胸下（みぞおち程度）ま

でだった。

「院長さん、この方はどちらさま？」

「つい先ほど来た被い屋の方ですよ。数日泊まることになったので、空いているお部屋へ案内してあげなさい。」

「うん。えっと、こちらです。」

「ありがとうございます。それでは、神官様、少しの間お世話になります。」

「いえいえ、お気になさらず。祈祷の時間は朝と夜の食事の前です。どうぞ、ご参列ください。」

「はい。」

院長に一礼し、ネーラに続いて左奥の廊下へ向かった。

「ハライヤの方がお泊りになれるのはめずらしいですね、なんのようじで来たんですか？」

若干舌足らずなものの、真面目そうな少女だと印象を受ける。

歩幅も少女の方が短いのに、歩く速さもあわせてくれているようで丁度良かった。

「手紙を届けに来たんだよ、後は礼拝のためだね。」

「そうですか、誰へのテガミですか？」

「ライヤさんって人。知ってるかな？」

「ライヤさんなら知ってます。とても仲良しのおねえさんで、いつもお世話になってるんですよ。」

少し嬉しそうなネーラを見ると本当に仲が良かったな感じた。

「いま、ライヤさんは屋上でおせんたくしていました。帰って来たときに見えたんです。」

「そうか。」

「ライヤさんもオハライの霊力を使えるんですよ。あまり得意じゃないって言ってますけど、私は上手だと思います。」

「・・・・。」

『森のツキモノのことについて話を聞いてみるか・・・・。たぶん、半年前からのことで何か気付いてるだろう・・・・。』

お部屋に案内してもらった後で、屋上に行ってみようか？

「はいっ。この、一番奥が旅人の宿部屋になってます。シスター長が毎日掃除してるのできれいですよ。」

「そっか。」

『さっきの院長に仕えていたシスターかな・・・・？』

ネーラに扉を開けてもらい、中に入ると確かに掃除は行き届いているようだった。軽く部屋を見渡し、適当なベットの足元に荷物を置いた。

「さあ、屋上へ行こうか。」

扉の脇に立つ少女から、元気な返事が聞こえた。

修道院の屋上では、2人の女の修道女が洗濯物を回収し終えたところだった。

「ありがとう、ミラ助かった。」

「ううん、気にしないで。だって、最近疲れてるでしょ？ライヤも

勉強熱心だねえ、そういうところ尊敬しちゃうな。」

「あはは・・・。」

一人はライヤで、もう一人は彼女の友人のミラである。

二人はほぼ同時にこの修道院来て、それからの友達だった。ミラは今日の夕食の支度まで特に仕事は与えられていなかったため、午後からライヤの手伝いをしていたのだ。

二人は、太陽の香りのする洗濯物の入った籠を一つづつ持ち上げた。

「あれ？ネーラちゃんだよ。」

ミラが屋上にやってきたネーラに気付き、ライヤも駆けてくるネーラを認めると二人は籠を下した。ネーラはライヤに抱きつき、「ただいまです。」と微笑んだ。

そんな二人のことを、姉妹のようだと思いながら被い屋が片手をあげ挨拶しながら歩み寄ってきた。

「どうも、こんにちは。」

ライヤとネーラは話し始めてしまったので、ミラが被い屋の挨拶に返事をした。

「こんにちは、ようこそアキシナ修道院へ。もう院長にはお会いになられましたか？」

「はい。いまは、ネーラに案内してもらってるところです。屋上に知り合いの修道女の方がいらつしやると。」

「なるほど。」

同じようなことを、ライヤ達も話していたらしく、ライヤがネー

ラを抱えたまま挨拶した。

「こんにちは、被い屋の方なんですか。」

「ええ、町で仕事を終えたところで、ライヤさん宛ての手紙を預かったのです。」

「あ、祖母ですか？」

「そうです。少し急ぎだったようですし、引き受けてきました。」

「すいません、ありがとうございます。」

ライヤはお礼を述べながら深くお辞儀した。
すると、ミラが籠を持ってライヤを促した。

「じゃあ、早く仕事片付けちゃあ。」

「あ、うん。」

「ネーラも手伝っていいですか？」

籠は全部で4つあり、3人では往復の必要がある。なので、被い屋もライヤにツキモノについて、訪ねたかったので、手伝いを申し出た。

「じゃ、奥の2つは俺で持ちますよ。籠も小さいので持てるかと。ネーラは二人を手伝ってあげて。」

そう言って、籠の1つ担ぎあげ、もう1つを抱え上げた。

「わあ、ありがとうございます。」

「いや、ミラ……。関心してる場合じゃないでしょう。お客様に手伝わせてどうするの？あの、いいですよ、どちらにしても、往復する予定だったのです。」

「いえいえ、これくらいなら大丈夫ですよ。」

「小さい方はネーラが持ちますよ。」

脇に抱えている方の籠を指している。実際、この籠の大きさは2人分くらいの大きさに楽に運べるので、ネーラでも持てそうだった。

「分かった、じゃあお願いするよ。」

「はい。」

ネーラは持ち慣れた様子で籠を受け取り、小さな掛け声とともに、籠を担ぎ上げた。

「つと、できました。」

「わわ、重くないの？大丈夫？」

ミラが心配するが、本人の方は全然平気そうだ。

「想像以上にパワフルな子だ・・・。」

「そうなんですよ。運動神経もいいし。いつも、すごく助かってます・・・でも、無理しないでね。」

「はいっ。」

ネーラの返事を受けて4人は階下へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6994p/>

袈い屋 ~ exorcism of monster ~

2010年12月31日08時19分発行